

出会い、自分をみつめて

教員になる前の私は、部落差別は、どこか遠くのもので、自分には関係のないことだと思っていました。でも、見えていなかっただけ、気づいていなかっただけで、部落差別は私の身近に確かにあったのです。

教員になって

私は、教員になって[※]識字学級に関わるようになりました。そこには、教育から遠くに置かれた人たちが文字を取り戻していく営みがありました。

「子どもの頃は、家の手伝いで学校に行けんやった。」
「結婚したくても、部落の出身だからという理由で、結婚できんかったとよ。」

そこで出会った人たちが語る差別の現実、当時の私にとって、衝撃的なものでした。それでも、今まで部落差別と出会ったことのなかった私は、どこか昔の出来事のように感じていました。今はほとんどなくなっているだろうと思っていたのです。

※識字学級とは、部落差別によって学ぶ機会が奪われた「文字」を習得することから始まった取組。現在は、部落差別をなくすための学習がさまざまな形で行われています。



私は今、福祉の仕事をしとるんよ。
利用者さんと話したら、
「A町のあたりは部落だから
近づかない方がいいよ。」
と言われたんよね。
「私も部落の生まれなんだけど。」
と言いたかったけど、
やっぱり言えんかった…。



会社の営業の仕事で、
上司を隣に乗せて
運転していました。
ある地域の近くを通っていたら、
上司が、
「このあたりは部落だから
気をつけるよ。」
と声をかけてきました。
胸が苦しくなって、
頭が真っ白になって
何も言えなかったです。

「部落に関わりすぎない方がいいんじゃない。」
「こわい人も多いんですよ。」

識字学級に関わって数年が経った頃、母が口にした言葉に胸が苦しくなりました。愛情いっぱい私を育ててくれた母の中にも、部落に対する差別意識があることに気づいた瞬間でした。部落差別は私のとても身近なところにあったのです。これまで関わった地域の方や子どもたちの顔が次々に浮かんできました。「その言葉で、傷つく人がいる。思い込みで言うのはおかしい。」と思いました。でも、その時の私は「そんなことないよ。自分で決めていることだから。」と返すことしかできませんでした。

地域の親との交流会で

「先生は部落差別と出会ったことがありますか？」
交流会で地域の親たちから問われた時、ドキッとしました。自分の経験を話すことは勇気があることでしたが、思い切って母の言葉にうまく返事ができなかった後悔を語りました。「どうしてちゃんとおかしいと言ってくれないのか。」と言われても仕方ないと思っていましたが、親たちは、「何も言えないその気持ち分かるよ。」と自らのことを語ってくれました。

親たちが語る差別の現実、部落差別が決して昔の話ではなく、私たちが暮らしている「いま」の社会で起きていることを教えてくれました。

親たちは、どれだけ「間違っている！おかしい！」と声に出したかったでしょうか。当事者が、「おかしい」と言いたくても言えない、そんな社会の現状があるのです。そして、母に何も言えなかった私は、そんな社会をつくっている一人であることに気づかされたのです。

差別をなくつていけるのは

生まれた場所、住んでいる場所でその人の何が分かるのでしょうか。「こわいらしい」「近づかない方がよい」といった噂や偏見によって、声にならない怒りや、悲しみ、生きにくさを抱えながら暮らしている人々がいます。そのような社会の問題は、見ようとしなければ見えず、変えようとしなければ変わりません。

社会を変えていくのは、今の社会を生きる私たちです。まずは社会にある差別のおかしさを正しく知っていきましょう。そして、自分を見つめ、おかしさに対して声をあげていきましょう。私たちの意識で社会は変えていけるのです。私も、母に自分の思いを伝えることから始めていきます。